

ディケンズとホガース姉妹 ——『人生の戦い』をめぐって——

牧 嶋 秀 之

ディケンズの『人生の戦い』(*The Battle of Life*, 1846) は、クリスマス・ブックスと呼ばれる一連の作品群のうちの第4作である。ディケンズはそれまで *A Christmas Carol* (1843)、*The Chimes* (1844)、*The Cricket on the Hearth* (1845) をそれぞれクリスマスの時期に発表し、『人生の戦い』の後は、*The Haunted Man* (1848) を発表した。1852年には、チャップマン・アンド・ホール社が以上の5作品を一巻にまとめて、『クリスマス・ブックス』として出版した。ただ、この『人生の戦い』はこれまであまり高い評価を得ていない。「彼の全作品中、議論の余地のないほどもっとも欠点が多く、人々の評判も悪い」⁽¹⁾、「文学として見た場合、最初の5段落を読んだだけでこれが失敗作であることがわかる」⁽²⁾、「感情が誇張さればかげていて、現実にはありえない」⁽³⁾等、酷評されている⁽⁴⁾。しかしこの小説のテーマは「歴史上多くの戦いが行われた戦場で、現在は人々の人生の戦いが繰り広げられている」というものであり、本来ディケンズは同じテーマで長編を計画していた。しかし『ドンビー父子』を執筆中であったこともあり、クリスマス用の短編のテーマにしたのである。従ってテーマという意味では太い柱が小説中をしかりと貫き、登場人物についても哲学的思考をするジェドラー医師 (Dr. Jeddler) や、多くの研究者が魅力的だと指摘する小間使いクレメンシー (Clemency) 等、脇役たちの造形もみごとである。サスペンス的な要素も含み、小説の後半でマリオン (Marion) が姿を現すかどうかという場面では読者に大きな高揚感を与える。もしこの作品でやや退屈な部分があるとしたら、二人の弁護士クラッグズ (Craggs) とスニッチー (Snitchey) の生態を描く場面であろうか。

一方で、この作品は、文学的価値とは違った面からの批評がなされている。それは、この作品に登場する姉妹が、ディケンズの妻キャサリン (Catherine) の二人の妹をモデルにしたものではないかという観点からの研究

である。『人生の戦い』ではグレイス (Grace) とマリオンという姉妹がともにアルフレッド (Alfred) という青年を愛し、妹のマリオンがアルフレッドと婚約するが、マリオンはグレイスのために姿を消し、自分が犠牲になってグレイスとアルフレッドが結ばれるように仕組む。この姉妹のモデルが、キャサリンの妹メアリー (Mary Hogarth) とジョージナ (Georgina Hogarth) ではないかというのである。

キャサリンは男の兄弟 5 人、女の姉妹が自分を入れて 4 人という家族の中で育った。キャサリンは長女で、1837 年にディケンズと結婚した。キャサリンは芸術に対する関心が薄く、その点がディケンズは不満であった。結婚当初から夫婦の仲はしっくりせず、1858 年に離婚が成立した。一方でディケンズはキャサリンより 4 歳年下のメアリーをことのほかかわいがり、彼女が 1837 年に突然に病死したときには大変な嘆きようであった。メアリーは姉の求婚者としてディケンズを知るようになったときにはまだ 15 歳であり、そのわずか 2 年後にこの世を去ってしまうのであるから、この世においてメアリーとディケンズが親しく過ごした時間はごく限られたものであったが、ディケンズは生涯メアリーのことを忘れることがなかった。またキャサリンより 11 歳年下のジョージナは、1842 年、15 歳のときにディケンズ家でキャサリンの家を手伝い始めてから、後にディケンズ夫妻が離婚したあともディケンズの元に留まって彼の身の回りの世話をし、1870 年にディケンズを看取った後、1917 年に 90 歳で亡くなるまでディケンズ家で過ごした。彼女は終生独身を通した。ディケンズと共に過ごした時間の長さという尺度から言えば、メアリーとジョージナは比較にならない。しかし、多くの研究書が伝えているように、メアリーとジョージナは、質こそ違え、同じようにディケンズの人生において大きな位置を占めていたのである。従って、この二人が彼の作品のモデルとなったとしても不思議ではない。

パーシー・フィッツジェラルド (Percy Fitzgerald) は、『人生の戦い』とホガース姉妹をもっとも早い時期に結びつけた人物のひとりである。1902 年に彼は雑誌に “Dickens in His Books” という記事を書き、「メアリーはキャサリンより魅力的で、しかもディケンズのことを密かに愛していたのに、なぜディケンズはメアリーと結婚しなかったのであろうか」と書き、「答えは『人生の戦い』の中にあるのではないか。つまりメアリーは、キャサリンも

ディケンズを愛していたことを知っていたので、自分の愛情を隠したのではない。これこそ、ディケンズが自分の愛した女性と結婚しなかった唯一の合理的な説明である」と述べた⁽⁵⁾。しかも彼はメアリーをキャサリンの姉だと言った。この記事に対して、当時まだ存命していたジョージナがディケンズの息子のヘンリーにアドバイスをし、彼は出版社を通してフィッツジェラルドに抗議した。出版社はすぐに誤りを認めて雑誌に謝罪文を載せ、「キャサリンが結婚したときにはメアリーはまだ 15 歳で学生だった」と書いた。フィッツジェラルドの記事は初歩的なミスを含む粗雑なものだが、人々にこの作品とホガス姉妹とを結びつけて考えるきっかけを与えたことは確かである。

『人生の戦い』の姉妹の名前を手がかりにこの作品を分析したのがステイヴン・マーカス (Steven Marcus) である。彼は、作品中の姉妹の名前の頭文字 (M と G) が、ホガス姉妹と同じだと指摘した上で、作品中ではグレイスが姉、マリオンが妹となっていることについて、『人生の戦い』執筆時点でジョージナは 19 歳であり、メアリーは亡くなったときの 17 歳のままでディケンズの心の中に封印されているからだと言っている⁽⁶⁾。さらに、「この小説が語っているのは、メアリーの死が、ある意味でディケンズに対する愛から生まれた自己犠牲なのだということである」⁽⁷⁾というくだりでは、上述のフィッツジェラルドの影響がうかがえる。

その後、マーカスの研究をふまえて、マイケル・スレーターはプロットに沿う形で作品分析を進めた。「ディケンズがちっちゃな家政婦さんと呼んでいたジョージナは、静かで家庭的な人物のグレイスとして描かれる。彼女は家庭を愛し、自分を抑え、やさしく控えめである」と述べ⁽⁸⁾、メアリーは、「姉より美しい妹のマリオンとして描かれ、物語が進むうちに、高尚で精神性の高い人物になっていく」とまとめている⁽⁹⁾。

物語中に見えるマリオンの精神性とは具体的にどのようなものであろうか。

彼女の表情には、勝ち誇ったようなところはない。人より勝っているという意識や、プライドが高いという様子もない。そんな気持ちがあれば、あのような穏やかな表情はできないものだ。ただ、彼女の顔には、愛と

感謝だけが表れているのではない。もちろん愛と感謝は含まれているのだが。汚れた考えからあのような表情は生まれない。汚れた考えはひたいを輝かせることはなく、あの唇のそばに寄ることもなく、輝く光のように魂を動かすこともない。あの思いやりのある人物が感動でうち震えるような気持ちになることもないのだ。⁽¹⁰⁾

マリオンが失踪した後、彼女が望んだようにグレイスとアルフレッドは結婚する。そしてこの夫婦に娘ができたとき、夫婦はマリオンという名を付ける。ディケンズが自分の長女にメアリーと名付けたのと同様である。また、『人生の戦い』の話者はグレイスの中にマリオンのおもかげを見る。「失踪した娘の魂はこの目に表れていた。そう、姉のグレイスの目の中に。グレイスは今、夫と果樹園の中で座っている。今日は彼らの結婚記念日であり、またアルフレッドとマリオンの誕生日でもある」(301) ちょうどディケンズがジョージナの中にメアリーのおもかげを見ていたのと同様である。

ただ、『人生の戦い』の姉妹を、ディケンズの義妹であるホガース姉妹に引きつけて考える場合、いくつか問題が出てくる。上述のように、人物造形としては両者に類似点はあるものの、客観的事実という点では両者に類似性があまりないからである。たとえばホガース姉妹は作品中の姉妹とは異なり、ともに生涯独身であったこと、また二人が同じ男性を愛したことはありえないということなどである。ありえない、というのは、メアリーが17歳で亡くなったとき、ジョージナはわずか10歳だったからである。

また、ディケンズがこの作品を執筆中に、ホガース姉妹を念頭に置いて書いたという記録が見あたらない。ディケンズは作品を執筆する際、プロットや人物造形等さまざまなことを友人のジョン・フォースター (John Forster) に相談し、幸いその多くが手紙だったため、現在我々はディケンズの創作意図をかなり詳しく知ることができるのだが、『人生の戦い』に関する手紙にはホガース姉妹の名前は出てこない。これは彼女たちへの愛情を隠すためにあえて手紙にかかなかったということではないだろう。彼の一番のお気に入りだったメアリーへの愛は、別の手紙では少しも隠すことなく何度もフォースターに書き送っているからである⁽¹¹⁾。『人生の戦い』に関して彼がフォースターに語っているのは主に執筆に関する苦しみである⁽¹²⁾。従って、ディケン

ズの手紙からは、ホガス姉妹をモデルにした人物を描こうという意図は見られない。また、作品によっては彼は詳細な創作メモを残しているが、この作品についてはそういったメモは作らなかったと考えられる。

さらに、メアリーとジョージナが実際に仲の良い姉妹であったかどうかについては不明である。これに関してはあまり資料がないのだ。メアリーとジョージナそれぞれについてはさまざまな研究書に記述があるが、二人の関係についての客観的な記録はあまり残されなかったようである。従ってこの点についても創作と事実の間の共通点は見いだせない。

このように、グレイスとマリオンの姉妹のモデルがホガス姉妹であるという具体的根拠が見られない以上、両者の関係についてはあまり強く意識する必要はないのではないか。実際にディケンズは、メアリーに対して生涯変わることのない深い愛情を持ち続け、かつジョージナとは彼女が 15 歳の時から 28 年間共に過ごしたのであるから、姉妹と聞けば読者は当然ホガス姉妹を連想する。しかしそういった伝記的事実と作品中の人物とを単純に結びつけるのはやや早計であるように思える。むしろグレイスとマリオンのそれぞれに、メアリーとジョージナが少しずつ溶け合っていると見るほうが妥当なのではないだろうか。

マリオンは婚約までしたアルフレッドの元を去り、6 年間も行方をくらます。長期にわたる自己犠牲という点ではジョージナと共通である。ジョージナはしばしば『デイヴィッド・コパーフィールド』のアグネスとの類似性を指摘されている。デイヴィッドはドーラに見いだすことのできなかった人間的特質をアグネスによって満足させられた。同様に、ディケンズは、ジョージナに知的共感を求め、彼女に自分の感情を理解してもらい、彼女の実務的な常識を頼りにした。一方ジョージナはキャサリンが傑出した小説家の妻としては不十分であることを察知していたので、ディケンズが創作活動を円滑に進めることができるように、家庭内をうまく切り盛りするよう努めた。ただ、ジョージナに対するディケンズの愛情は、あくまでも肉親に対する親しみだったのであろう。アーサー・エイドリアン (Arthur Adrian) が指摘するように、アグネスの描き方を見ると、ディケンズはアグネスの原型 (つまりジョージナ) に対して恋人としての感情は持っていなかったの
⁽¹³⁾
であろう。

ディケンズは書簡の中で「ジョージナは彼女の青春、そして人生のもっともすばらしい時期を犠牲にした」と述べたが⁽¹⁴⁾、本当の犠牲的精神が発揮されたのはディケンズ夫妻の離婚のときである。キャサリンの母親がディケンズの家を出るよう強く求めたにもかかわらず、ジョージナはそのまま残ることに決めた。これはディケンズの子どもたちに強い愛着を持っていたからだと言われている。キャサリンの母親は激怒したが、ジョージナの決心は変わらなかったのである。

『人生の戦い』で自分の気持ちを犠牲にしたのは姉のグレイスも同様である。そもそもマリオンとアルフレッドが婚約するように先に自分の愛情を押し殺したのはグレイスである。父親のジェドラー医師はグレイスを評して「家庭に彩りを与え、自分を犠牲にし、気持ちが優しくて控えめである一方、志操堅固で勇気もある」(244)と言う。このような娘二人を眺めながら、彼は続いてこう考える。「二人のことを思うと不憫でならない。なにしろ、人生は実にばかげたものだからだ」(245)ジェドラー医師のこういった人生観は、物語の中で何度か繰り返される。語り手は言う。「彼の哲学の要は何かといえば、世の中は巨大なジョークで、理性的な人間がまじめに考えるほどの価値はないということである」(243)

ジェドラー医師はなぜこのような人生観を持つようになったのであろうか。その理由はこうだ。彼の地所はかつて戦場であった。一年のどの日をとっても、かつて戦争の行われなかった日はない。ここで累々と屍が積み重なったのだ。地面を掘ればおびただしい数の骨がでてくる。しかし戦った兵士たちは、何のために戦っているのか、なぜ戦っているのかほとんど誰も知らなかった。勝って無邪気に喜んでいる人々も、なぜ喜んでいるのかほとんど誰も知らなかった。そんな戦争をしていったいどんな利益があったのか、結局誰にもわからなかった。殺された人を悲しむ気持ち以外に、はっきりしているものは何もなくあった。こんなことをまじめに考えられるだろうか。まじめに考えようとすれば、気が狂うか、山の上に行って隠者にでもなるしかない。彼はある日の朝食の席でこのような趣旨のことを言い、笑う(250)。それを聞いて、弁護士のスニッチー氏は、人生には多くの愚行がつきものだが人生を笑ってはいけない、と返す(251)。これに続いて、ジェドラー医師の下で勉強をしていたアルフレッドは、ここが戦場であったことをときどき

は忘れてもよいのではないか、ここには人生というより大きな戦場があり、そこには太陽が照っているのだから、と言う。さらに続けて彼は、この世の片隅で、誰にも気づかれられないような偉大な自己犠牲が行われているはずだ、そういった気高い行為はどんな気むずかしい人間の心も和らげるはずだ、と言う (251)。ジェドラー医師は、自分はもう年だから考えは変わらないよと言った上で、自分はこの戦場で生まれた、そしてこの 60 年、心優しい母親も、善良な娘たちも、みんな戦場だけはごめんだと言うのかと思うと実はそうではないというのを見てきた、こんな矛盾があるだろうか、こんな現実をまのあたりにしたら笑うか泣くかどちらかしかないだろう、それなら私は笑いたいんだ、と語る (252)。この会話は小説のテーマに直接関わる重要な部分だが、このときグレイスとマリオンの姉妹は「熱心に耳を傾けている (Both the sisters listened keenly)」のだ (252)。

姉妹がこれらの会話のどこに共感したのかは書かれていない。しかし、この朝食後、ジェドラー医師から独立して修行するために去って行くアルフレッドと、別れの挨拶をするグレイスとの会話によって、このときグレイスは自分の恋愛感情を犠牲にする決心をすでに固めていたことがわかる。アルフレッドはグレイスに対し、「君を呼ぶときに妹という言葉が自然に出てくるよ」と言い、グレイスは、「それを聞いてうれしいわ、ほかの言い方では呼ばないで」と答えるのだ (257)。『人生の戦い』に関してはマリオンの失踪という形で自己犠牲についてばかり言及されることが多いが、姉のグレイスが妹の恋の成就を願って自分の心を抑えていたことを忘れてはならない。

6 年間の失踪の後、マリオンは姿を現し、これまでの経緯を説明する。事実を知ったジェドラー医師は驚き、感動して言う。この世は真心で満ちている、愚行も多いが、真剣に生きなければいけない、血の流れない戦いも数多くあり、それを太陽は見ているのだ、と (308)。この世を「巨大なジョーク」だと言っていたときの彼と好対照である。

マリオンとグレイスの姉妹は共に強い精神の力を発揮して互いの幸福のために尽くした。彼女たちは望む結果を得ただけではなく、さらに副産物として父親の人生観の変化をももたらした。このような姉妹間の愛情はディケンズが好んで作品中に描いたものである⁽¹⁵⁾。マイケル・スレーターは「彼のあらゆる作品に言えることだが、ディケンズにとって「本当の女性らしさ」の

本質は、他の女性といかに親密に「姉妹のような」関係を築くことができるか、ということだ」と述べている⁽¹⁶⁾。その意味で、ディケンズは、結婚後すぐに義妹のメアリーが自分たち夫婦と一緒に住み、妻キャサリンと仲の良い姉妹の姿を見せてくれたので、幸福だったであろう。メアリーが亡くなった後で彼が味わった喪失感は、単にメアリーが彼のお気に入りだったというだけではあるまい。実際、5年後にジョージナがディケンズ家に住むようになり、メアリーの代わりを務めるようになって、ディケンズは大変に喜んだ。彼にとって重要なのは、キャサリンの相手となる女性ができたとということだ。当時の書簡で、彼はキャサリンとジョージナを「私の二人のヴィーナス」「私の二人の可愛い子ちゃん」等と呼び、この姉妹に対する愛情を示している⁽¹⁷⁾。

『人生の戦い』において、マリオンとグレイスのモデルが誰であることを確定するのが困難であることはすでに述べた。また確定しようとしてもあまり意味がない。この作品では、中心人物が姉妹であることが重要なのである。マリオンとグレイスは、キャサリン、メアリー、ジョージナの誰であってもさしつかえないのだ。この物語の冒頭近くに、マリオンとグレイスが果樹園で踊る場面がでてくる。挿絵にもなっているので、読者には印象的な場面だ。5、6人の百姓女がりんごを摘む手を休めて、二人を眺めている。

これは、楽しく生き生きとして飾り気のない場面である。太陽が輝き、場所は奥まった田舎である。二人の少女が実にのびのびと何の憂いもなく踊っている。自由に、そして心から楽しそうに。…二人は踊りながら木々を抜けて行き、また戻ってくる。そしてお互いに相手をくるくると軽やかに回している。二人の明るい動きがまるで空気を揺り動かして伝わっていくように思える。ちょうど水面に輪が広がるように。(241-2)

かつての戦場で現在はこのような平和な場面が繰り返されている。戦場との対比という文脈の中でこの情景が描かれているのだが、二人の踊る様子の描写が巧みなもので、踊りばかりが印象に残る。ディケンズが理想とする姉妹愛の一つがここに表されていると言えるのではないだろうか。

(2007年2月)

注

- (1) Ruth Glancy, *Dickens's Christmas Books, Christmas Stories, and Other Short Fiction: An Annotated Bibliography* (1985), p. xix, quoted in Paul Schlicke ed., *Oxford Reader's Companion to Dickens* (Oxford UP, 1999), p. 33.
- (2) Michael Slater, *Dickens and Women* (London: J. M. Dent & Sons Ltd), p. 96.
- (3) *Morning Chronicle* (24 December 1846), quoted in "Introduction" to *The Battle of Life* (London: Penguin English Library, 1971), p. 126.
- (4) 中には「姉妹がいつも抱き合って互いの気持ちを話し合うことなどありえない」という批判もある。*Weekly Chronicle* (26 December 1846), quoted in "Introduction" to *The Battle of Life* (London: Penguin English Library, 1971), p. 126.
- (5) Arthur Adrian, *Georgina Hogarth and the Dickens Circle* (Oxford UP), 1957 p. 236.
- (6) Steven Marcus, *Dickens from Pickwick to Dombey* (New York: W. W. Norton and Company), 1965, p. 289.
- (7) op. cit., p. 289.
- (8) Slater, p. 97.
- (9) op. cit., p. 98.
- (10) Charles Dickens, *The Battle of Life in Christmas Books*, The Oxford Illustrated Dickens (Oxford UP), 1954, p. 271. 以下、本文からの引用はこの版により、ページ数は本文中にかっこ書きで示した。和訳は拙訳である。
- (11) 『骨董屋』のネルの死を描いた際、ディケンズは次のように手紙に書いた。「小生ほどに彼女の死を悲しむものはいないでしょう。まことにどうも悲痛な思いで、このつらさは表現する言葉を知りません。…この悲しい物語のことを思うと、いとしいメアリーの死がつい昨日のことに感じられます。」1841年1月7日付、フォースター宛書簡。John Forster, *The Life of Charles Dickens (1872-74)*. 宮崎孝一監訳『チャールズ・ディケンズの生涯』上巻、研友社、1987年、102頁。以下、フォースター著の伝記からの引用はこの日本語版により、訳もそのままお借りした。
- (12) この作品を執筆中のディケンズは、同時に『ドンビー父子』も連載中であり、両方を書き進めるのは大変な苦勞であったようだ。1846年6月28日のフォースター宛の手紙でディケンズは『ドンビー父子』の執筆を開始したことを告げ、ま

たクリスマス・ブックスの一編として「戦場」をテーマにした作品を書きたいと述べている。これに対してフォースターは、二つの物語を同時に始めるのは冒険だと返事をし、その心配通りにディケンズは大変な産みの苦しみを味わった。彼は、フォースター宛の手紙でつぎのように語っている。「先週中ずっと、『人生の戦い』は、整頓することも抜け出すこともできないひと続きの部屋であって、自分は一晩中その中を侘しい思いで歩き回っているのだという夢を見続けていました。土曜日の夜は一時間も眠らなかったと思います。…その精神的苦しみは言語に絶するものでした（1846年10月20日付）。フォースター、上巻、366頁。

(13) Adrian, p. 25.

(14) Slater, p. 169.

(15) 作品によっては、擬似的な姉妹間の愛情が描かれている。例えば『ドンビー父子』のフローレンスとイーディスは義理の親子ではあるが、姉妹のような愛情で結ばれている。

(16) Slater, p. 164。

(17) 「ジョージナはメアリーと精神的に似たところがある」、「楽しかった昔が帰ってきたようだ」と書簡に書いている。Slater, p. 165.